

風化しない記憶

——非日常の中の日常：1995 年西宮（13）——

原 田 隆 司

How We Remember the Disaster

——Ordinary Lives in Extraordinary Situations in Nishinomiya, 1995（13）——

HARADA Takashi

Abstract : This is a part of a research project on our experiences of the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995. In this paper I have focused on the memories of the vice-principal of the junior high school where I attended for eight months as a voluntary staff just after the earthquake.

He talked about his memories on the disaster : how he managed the evacuees on the several days after the earthquake, how he had organized the public shelter in the school for eight months. His most impressive memory was about the remains brought just after the quake. He had to keep them in the school building.

He had worked as a principal at several junior high schools for eight years after the quake. He had to talk about the disaster on January the 17th every year. It was difficult to talk about it to the students who had suffered by. He also mentioned about how we can remember a disaster for many years.

1995 年 1 月 17 日の早朝、「平成 7 年（1995 年）兵庫県南部沖地震」が発生した。その後の事態は「阪神・淡路大震災」と呼ばれている。

僕は 1 月 20 日から避難所が閉鎖された 8 月 20 日まで、西宮市内の中学校に、いわゆる「ボランティア」として通っていた。

12 年半後の 2007 年 9 月、当時の教頭先生に会い、話を聞くことができた。

1. 地震直後

〈自宅から学校へ〉

教頭先生の自宅は、西宮市の北部にある。

最初は、てんやわんや。

家は六甲山の北でしょ。幸い全然やられてなかった。電気は来なかったけど、ガスは集中プロパンで、いたんでなくて、ガスは出た。飛び起きて、擦り傷をしたけど、「うちがこんなに揺れたんやっ

たら、学校は何かあったら休校か何かせなあかん、とにかく行くわ」言うて、7 時すぎに出た。

そしたらトンネルの道はもう通行止めになって、その上の山道を上がったら、頂上のへんで道の半分ぐらい土砂や石がある。たまたまその間を行けたけど、今考えたらゾッとする。

山を越したとたんに、煙が見えるし、電気会社の三階建ての建物が二階になっていた。学校の近くに来たら、住宅はほとんど壊れている状態でしょ、電線は電柱から垂れ下がっている。

中学校に着いたのは 8 時半くらいかな。車を中に入れたけど、何やいっぱい地域の人 coming。大きな地震や、大変なことだ、と思った。校長先生は近いから、もう来られていて「よう来たな」言うて。「生徒は？」言うたら「生徒なんか来るかあ」言われて。職員室は、机がみんな流れとる。玄関の表彰なんか入れた棚は、みんな倒れとる。避難者ばかり。

その日は、来ている職員だけで、教室を掃除し

て、入ってもらえるように、全部掃除した。花瓶が割れてるのなんか片づけて、机もみんな片づけて。使ってもらうのは好きに使ってもらっていいが、やっぱり横にならなあかんやろから、机は横につめて、一階の教室から四階まで。

こうして、先生たちの手で避難者が入れるように教室が片づけられ、後からの推測でしかないが、おそらく900名ほどの人が入った。

〈電話とトイレ、電気〉

対応しなければならないことは、次々と発生していく。

夕方になって、はっと気づいたのは、赤電話に山ほど人が並んでる。今でも分からないけど、10円玉でしか通じへん、100円玉入れたって通じへん。「10円玉ないから先生替えてください」と言われて。ちょっと待ってよ。そうやわ、自分がもしこの状態だったら、親戚に連絡したい、と思う。

それからや、10円玉の両替、夜中ずっと。今でも忘れへん。10円玉をたらい回しや。

—それが17日の晩。

そう。

—何か、食べましたか。

もう、覚えてへんわ。何も食べるもんなかった。そのときまだ物資は何も入って来なかった。水、言うたって、水道出えへん。

トイレも、現実には、予想を越えていた。

次、トイレや。ずっと見て回ってくれてた先生が、「教頭先生、トイレ大変なことになってる」って。「ほんなら、バケツみんなかき集めて、教室に入っている人に何人か来て貰てな、プールに山ほど水あるんやから、そこから水を汲んで貰って、トイレにおいとけ。で、使ったら流して貰うように」と言うたら「分かりました、すぐ行ってきます」と言っただけで、帰ってきて言うには「教頭先生、プールの水、ひとつもありません」。

それで「なんで昨日地震があってプールの水がなくなるか」いうて一緒に行ったら、あらへん、ぜんぜん。それで困ってしまって、玄関の横の空き地のところに鯉を放している池があったんで、しばらく、そこから水を運んだ。

しかし、結局トイレは詰まってしまう。

で、考え出したんが、段ボール箱にな、黒のゴミ捨て用のビニール袋あるやん、それを置いて、してもらう。そして、何人か使ったら口を縛って、それを玄関の外に並べておいたんや。手を汚さないで持っていく。仮設トイレが来るまでの仮設トイレ。

夜の対策も必要となった。

電気が来なかったでしょ、2日間か3日間。それで階段とか暗いところに、ロウソクをずっとつけて回った。それでまあ移動してもらえる。夜居る先生が、手分けして、階段のすみすみ、廊下にも点々と置いていって。

その間に、どんな人が入って来たのか、自分の家に帰ったり、どこかに行ったりは、把握できない。出入りはずっとあったと思うけど。

その間にトラブルがあったのは、家から電熱器を持って来てな、やっぱりあったかいものを食べたいんやろ、それをコンセントに何人か差すから、それに寒いから電気ストーブを差すもんやから、電気が飛ぶ。それで、それを断わって回った。

〈遺体〉

こうして次から次へと対応を迫られる事態に加えて、別の対応も必要であった。

今回話をうかがって、あの震災の記憶として、教頭先生の口から最初に出て来たのは、遺体のことであった。

あれだけ遺体が入って来て、[西宮市内にある]満池谷^{まんちだに}の火葬場もやられとるし、警察も忙しいから検死ができないでしょ。だから長いこと、運べなかった。会議室に遺体置いたままで。「おまえらいつまで置いとくんや」って怒られるんやけど、私らが怒られても検死は済まへんし、焼き場はないしやな……。遺族の方の気持ちは痛いほどわかる。

なんぼ冬やいうたって腐敗するから、市がドライアイスを持って来て、それを入れていったんや。「先生、すいませんけども、ドライアイスで、保存お願いします」言われた。「分かりました」いうて、会議室と体育館の下の金工室に、遺体置いとったでしょ。会議室の机を合わせてその上に12体。金工室は机が大きいから、そこにも置いておい

た。

検死がないのに勝手に持って行った人もあったけど、受け付けてもらわれへんで、また持って帰ってきて「先生、勝手にしてすみませんでした」言うて。気持ちがわかるから、つらい。

遺体のことやから、私ら毎日回るでしょ。家族も来はるし、それで朝行ったら、遺体がない。「あれ、どないしょ、校長先生、遺体がない」言うたら「そんなことあるか、遺体が歩いていく訳ないやろ」と校長先生。近くに置いてあった別の遺体の家族がおられて「夜中に家族のひとが運びだされましなよ」「え、黙った行ったんかいな」「黙って」。

どうしてか言うたら、芦屋の浜のヘリポートから、京都まで運べば、焼いて、持って帰れる。ただしそれに乗れるのは、遺体と、遺族一人という条件が付いとる。そういう話を、私がしたと思う、確か。そのことを聞いて、たぶん家族が自分で連絡をとって、芦屋に運んで、京都まで行ったんだと思う。

避難所となった中学校で、どのようにして遺体を受け取ったのか。

それは、運んで来た人が置くでしょ。その時に「この人は誰々です」って分かる人もある。それを私が書き留めて、筆で書いて、丁寧に。それを、誰かが来られた時に分かるように、ちゃんと枕元に置いた。

布を払って、頭から腹から足下にドライアイスを入れなアカン。それで、夜 8 時頃に職員室で「ドライアイス入れにいくから、誰か一緒に来て、手伝ってくれ」言うても、だれも来いひん。

この遺体をめぐる話は、そのまま、避難所という空間と、その外側とも関係していく。

遺体というのは、もう、どうしようもないもん、それで覚えているんかな。卒業生も一人いたでしょ、高校生の男の子が、だから余計に不憫で……

だいたい、人の遺体を見るのは、家族、親族ぐらいのもんでしょ。私も、いろんな葬式に行ってきたけど、その時に「最後のお別れを」と言われてもな、親族でなかったら、ほとんど顔を見ないでしょ。だから、そういう意味では余計に、遺体があれば並んでいるということ自体が、何というかな

……大変なことが起きた。

それに、中学校と〔すぐ南の〕小学校の間の道路は、芦屋や神戸から〔阪急電車の〕西宮北口駅に向かう人が、ザーザーザーと足音を響かせて歩いてる。これほんとに日本の国かな、戦争しとる時の状況と違うか……。

外では、ほんとに黙々と歩く人の足音がする。声はない。一方で遺体があるでしょ。そして、教室は避難者でいっぱいでしょ。

地震直後は、阪急電車は西宮北口までしか動いていなかった。たくさんの人が、その西に位置する芦屋や神戸と東の大阪との間を移動するために、駅へ、そして駅から、黙々と歩いていた。

塀を隔ててその足音が響く中学校の校舎は、廊下や階段はロウソクで照らされ、多くの人たちが出入りをしてた。そして、一階の会議室には遺体が置かれ、別の所では、避難した人たちが夜通し赤電話で連絡をとっていた。教頭先生は、赤電話の硬貨の出し入れ口を開け閉めして、10 円玉を交換し続けた。その上の教室は、およそ 900 名の避難者でいっぱいであった。避難した人たちも、暖をとったり温かい食べ物をと、それぞれに使えるものを持ち込んでいた。その結果が、電気の問題であり、トイレの問題であった。

私も結局、最初に行った日から、すいぶん家に帰ってなかった。最初に帰ったのは、一週間か 10 日ぐらいたってくらいからかな。だいたい電話の騒動が落ち着いて、電気が来だして、水道が長いこと来なかったから、給水車が和歌山やいろんな所から来た。そして、電気が来だしてみんなちょっと落ち着きはったんかな。で、食べ物もちよこちょこ入ってくるようになったでしょ。でも一回帰ると、道が混んでて、出てくるのに 3 時間かかる。あの頃、帰るのは 1 週間に 1 回くらいのペースだったな。

〈仮設住宅と食べ物〉

こうした時期のことで、教頭先生の記憶にあるのが、仮設住宅と食べ物のことであった。

仮設住宅の第一次の結果は 2 月上旬に避難所で掲示した。

それから、やっぱり仮設。抽選があったやろ。貼り出されたやろ、番号が。たぶん、家庭の条件も考

慮されたと思うけど。私らたいがい校長室に寝とったでしょ、そしたら何人か、怒鳴り込んで来るんよ。今でも覚えているのは「あんたらが、私ら当たらんようにしたんか」と、文句言うてくる。やっぱり避難所での生活からいかに早く抜け出して、どこでもいいから自分たちの生活ができる、自分たちの空間がきちんと確保される、そういうのが、どこにも捌け口を持って行きようがないから、私らしか当てがないから、校長室に怒鳴り込んで来る。「そんなこと言われたって、私らが引いた訳ではないし、私らが『あんた入り、あかん』とか決められへんのやから、それはちゃんと市の対策本部がやってんのやから、私らに怒鳴られてもどうしようもないやんか」言うて。そして、言うだけ言ったらな、気がすんだんか、帰っていかれた。

避難所で申込書をまとめ、抽選の結果も避難所で掲示したために、そうした受け止め方が生じたのだろうか。

そして、食べ物のことも、教頭先生に記憶にあった。

それからもうひとつ覚えているのは、最初の頃、やっと弁当が届くようになった。それを配るのに手伝いに来てくれていたボランティアの人が、「先生どうしましょ、親戚が来たから弁当10個くれ言う人が来てはるんですけど」。「そうかそうか、それはあげん訳には行かんし、一応、対策本部のほうは、来る人に渡してくれ、と言ってるから」。「避難所に」住んでる人以外でも、地域の人に……。

同じように食事のことやけど、一時、中央体育館はいっぱい避難しとったし、マスコミからすればメインになるところやろ、色んなことが流れるやんか。そしたら、神戸のほうのビフテキを食べさせるというニュースが入った。そしたら中学に避難している人が「先生、きょうは中央体育館でビフテキやん」言うて、大挙して食べに行ったとか言うやろ。

そうしとったらまた、私と校長先生のところにな、弁当は3つの会社から順番に入っていた。内容がちょっと違とったとしても、「弁当が悪い、同じもんばっかり食べさせて」言うて文句を言いに来る……。

僕のメモによれば、2月9日には、次のような変化が起こっていた。

今日午後着いた物資に「幕の内弁当」が入っている。一昨日かその前の日に、それまでのおにぎり2個から、ごはん「おかず」2品（竹輪のてんぷらとこんぶ?）の「弁当」が登場したが、今日のはすごい。

そして、2月15日には、次のような状態になっていた。

現在の「最大の問題」は、外の人への食事の渡し方である。ここ2,3日、届けられる600食がなくなってしまっている。つまり、400食も外の人に渡っているのだ。本当なら次の食事に回せるものがすぐに出ていってしまうし、「幕の内」（今日はサーモンフライ、発砲スチロールの容器入り）になって更にもっといいものが出されるようになると、ますます食数は増えて、しかも次の食事にとっておくことはできない。

遺体、食べることと、仮設とな。やっぱり人間、食べるもの、自分専用の空間、個々のプライバシー、そういう面で常に守られてない状態でしょ。

これが当時のひとつの避難所の姿であった、ということができるであろう。

2. 学校と災害

〈中学校の運営〉

ここまでは、避難所としての対応であるが、もちろん、地震の前も後も、その場所は中学校であった。

地震の直後から、各学年の代表と担任は、名簿をもって家庭訪問をして、消息が分かったら丸をつけた。犠牲者は、在校生では女子が1名、そして卒業生が14名であった。

学校という場所が避難所になってしまったら、生徒のことはどうなっているのか、全然状況を把握できないから、学年毎に動いてくれと言うて、学年主任に任せて、特に3年生は進学のこともあるし、試験が2月の半ば、10日か15日やから、願書を出さなあかん。別室に3年生専用の部屋をとって、そこで進学の事務をするように言って、別格扱いしたんです。

学校は災害時には避難所になる場所であるが、地震の前には、そういう事態について、どの程度、意識されていたのであろうか。教頭先生は、以前にも同じ中学校に教諭として勤務されていた。

どこの学校でもね、校務分掌として「防災担当」というのがあって、それは消防署と連絡をとったり、年に2回の防災計画を立てて避難訓練を実施することになってる。昔、この中学に居た時に、私、たまたま防災担当に、当たった。

防災計画は、避難経路はこうなっていて、どこに集まるという計画をきちんと出さないといけない。生徒を安全に避難させるということで。その時、私が40過ぎだったかな、東海地震が非常に問題になった時だね。東南海地震、南海地震は3年の間隔をおいて来た。その時に地震学者が、東海地震だけは一緒に起きてない、だから近い将来必ず高い確率で起こるだろうということで、ずいぶん言われた時だった。それで、静岡のほうの学校に電話して、「すいませんけど、東海地震を予想されていろんな訓練されてて、準備されていると報道で耳にするんですけど、こちらのほうは今どうこうということはないんですけど、大地震に備えた訓練をしたいんですけど、どんなことされていますか」と聞いたことがあった。それで、資料を送ってもらった。

それで、火災訓練というと、いつも学校の火災訓練は、火が出るのは給食室か理科室に決まってる、火があるとこはな。で、給食室からよう文句が出た。「なんで先生、いつも給食室から火が出た火が出た言うの、いつも火に気を付けて一生懸命やってんの、なんで給食室ばかり出火場所になるの」と言われて、叱られた。「すまんすまん、今度は場所変えるわ」言いながらもな、次どこにしようかなと。やっぱり違ったところにしないと、経路の問題もあるしな。それで今度は地震の訓練をしようということで、確かその時にやったわ。

しかし、冒頭に記したように、そうした訓練が、避難所としての対応にまで生かされるということはない。災害時に校内の生徒の安全を確保するということと、外から入ってくる避難者への対応とは、まったく異なった事態である。

〈避難所の運営〉

僕がこの中学校に「ボランティア」として初めて行

ったのは、地震から3日後の1月20日の昼であった。今回、教頭先生から、僕が最初に行った時の校長先生のコメントを教えてもらった。

「先生、大学の先生が来はったけど、あんなん長続きせえへんで」と言うもった（笑）。

その通りであった。僕は3日間で疲れ果てて家に帰った。この時に職員室で寝ていた際、夜中の2時半頃に、ある先生が遺体を線香を見に行く場面を今でも思い出す。

再び訪れたのは、1週間後の28日であった。翌日の29日には、避難者に校舎から別棟の二階にある体育館に移動してもらい、30日から中学校の授業は再開された。

その日から、体育館の下の一階にある木工室が避難所の「本部」となり、僕は、同じようにほぼ毎日通ってきていた「ボランティア」数名と共にチームを組み、「本部の人」になった。僕たちは、2月、3月はほとんど毎日通い、中学校の校長先生、教頭先生、そして何人かの先生とも顔なじみになった。

今から振り返ってみれば、1月29日の移動から2週間、3週間、そして1ヶ月と経過するうちに、避難所としてのかたちのようなものができてきたとも言える。

校長先生は、教育委員会と連絡をとり、全体の大きな動きを知り、学校いつ再開できるか各校の状況を把握したり、校長会なんかの会合で話をしたり……。私ら、そういう場に出ない。戦場の将校みたいなもん。だから、その場その場で対応しないと、いちいち校長先生に「これどうしましょ」というのは違うし、それが出来なんだから教頭してたらあかんわ（笑）。

校長先生と教頭先生は、若い頃から顔なじみで、二、三度は同じ中学に勤めていたこともあったという。

一避難所として、うまいこと行ったんですね。

ボランティアとして来る人のなかでも、それぞれ、その場その場で目先の仕事だけを手伝って帰る人ってのは沢山ある、いろんな所からボランティア送ってくる訳だから。

そうじゃなくて、Aさんや原田さんは、校長や

教頭と接触があって、連絡をとり、全体の動きが分かった。ああいう形で勝手に「本部」作ってな（笑）。

こっちはこっちで学校の仕事が始まると、生活上の苦情なんかを、いちいち私らに持って来られても、たいへん。それを全部処理してくれたり、先生もなんやよう喧嘩もしてくれはったけど（笑）、そういうことをやってくれるようなボランティアというのは、そう多くないと思う。

いつのまにか、体育館にいる人たちを「中の人」、学校の外から弁当や物資をもらいに来る人たちを「外の人」と呼び、僕たちは「ボランティアの人」あるいは「本部の人」と呼ばれた。「本部の人」は、校長先生、教頭先生という「学校側」と「中の人」との間に立つことになった。しかし、ある問題については「学校側」を代弁し、別の問題については、「中の人」の主張を伝えたというに過ぎないと思う。

兵隊さんとしてのボランティアは、いっぱい来てくれたやんか。高校生も来た。それはそれで「何したらいいですか」「これ手伝ってくれや」ということで、できる。そういうボランティアはボランティアとして必要やし、なかったらなかなか動かん面もあるけども、その全体を把握して、避難している人の心理状態や生活状態やらを全部把握している。対応して、処理できないことは、そこの責任者、学校やったら校長、教頭と相談してな、処理してくれて、避難している人も満足してくれて……。

大事なことは、その場面その場面を把握して、的確に状況を判断して、連携して動ける人が何人おるかです。

これから考えられる関東のほうの大きな地震が起こったら、そこの責任者と連絡が十分とれるような立場のボランティアでな、全体の状況やその時の動きの方向を仕切ってくれと言ったらおかしいけど、全部任しておいてもやってもらえる立場のボランティアの人というのは、私は、絶対必要やと思う。

〈人間関係〉

こうして教頭先生にとっては、中学校としての仕事と、突発的に生じた避難所の運営という仕事が並行して続いた。

1月の地震発生から8月下旬の避難所閉鎖までの教

頭先生の体験について、もう少し踏み込んで聞いてみた。

—あの8ヶ月のなかで、勉強になったこと、学んだことって何でしょうか。

何というかなあ、人間の付き合いというか、触れ合いの仕方というものは、いろいろあると思うけど、どうしても、狭い学校の中での人間関係というのは、子どもと、その保護者と、教師仲間の付き合いでしょ。

保護者は、懇談する程度やから、そんなに深い付き合いはないので、あんまりその人柄は分からない、どんな人かということとは。

で、震災が起きて、地域の人がいっぱい来られて、緊迫した生活を送ってね、もうちょっと、何というかな、深い人間関係が築けると、あんたらボランティアを介して、もっと人間的に、気持ちの上での触れあい、そういうものがもっと深まるのかな、と期待しとったんや。

ところが出て来ること出て来るのが、どうしても、ああいう緊急した場面だったら、人間の欲望が先になっていくから、全部が常に要求として出て来るのね。「先生お世話になりました」と言う人も中にはいてるけど、どうしてもやっぱりああいう場面では、人の心が荒んじゃって、何というかな、もっともっと教師という立場やなくて、同じ被災者、被災地の人間としての、お互いの生活をどうしていったらいいとか、そういう関係がもっとできると思ったけど、要求とか、自分らの満足が得られない時には、全部そこの責任者というところに要求をぶつけて来る。そういう人間関係というのは、やっぱり突発的に起きたら、人間関係が非常に索漠としたものになっていくのかなと、そういうことは感じた。

人間というものは、普段のなかでは、深く関係を作らなくても何とか生活はまわる。けど、ああいう緊急事態になった時には、大変な時だから助け合って、自分もこうして欲しいんやけど仕方ないなという感覚よりも、自分の欲望とか、満たされないものを突きつけて来る人が多いんやな、というのは感覚的に思った。

あんたらボランティアが中心になって、週に2、3回会合を開いた、夜7時からとか。ああえことやな、助かるなと思ってる反面、行ったらすべて何かの要求に対してどうしてくれるかということの答えが必要でしょ。

体育館に移動してもらった日から、「中の人」の代表と「本部の人」と「学校側」とで会議をもつようになった。

「中の人」と「学校側」の間を調整したといえば聞こえはよいが、「学校側」も、市の対策本部との連絡窓口であるだけで、「中の人」の希望や要望は、学校のなかで対応できるものではなかったし、対策本部としても手の打ちようがないことも多かった。

「本部の人」の役割は、調整というよりは、双方の間で直接対決を避けるための緩衝材のようなものでしかなかったとも言える。

だからね、やっぱり、その、人間の心理的なものというのはね、ああいう突然のことが起きて、自分の身の回りに、自分に不利なことばかり重なって来た時に、何かにすがりたいという気持ちは分かるし、誰かに何とかしてほしいという気持ちは誰にもあるけど、そういうものが色んな場面で目についたり耳に入る。大変なことが起きた時には、人間ちゅうのは、弱いし脆いし、「地」が出て来るんちゃうかな、そういうことは一番感じた。

物質的な面というのは、何とでも解決していく、しばらくすれば、いろんなところから支援が来るし。これから大きな震災が起きたときに、結局人間の心理的なものが一番混乱を来した時が一番しんどいのやろうと思う。

3. 風化する体験、風化しない記憶

12年半の後に教頭先生と話をしていくうちに、体験そのものではなくて、それがどんな意味をもつものなのか、ということが気になってきた。

それは、次のようなことを伺ったからである。教頭先生は、地震の翌年から別の中学校で校長先生として仕事をされた。

子供らにしてみれば、他の学校に行く予定が、その中学校の近所の公園の仮設に入ったから、友達と別れたりする。そういう面での不安定さはあったとしても、全員が仮設に入れたら、学校としては普通の学校生活に帰っていく。

またその次の中学校では、「みんなのなかには家族がなくなれた人もいると思う。そしてみんなは、復興住宅に入ってきた人が多いと思う。先生も、以前の中学校で震災に遭って、大変な場面で一

緒に居たことを知っているから」と、いくつか話をして、「とにかく今、命あって生きてるんだから、がんばって自分を成長させよな」という話をして、30分くらいして、1月17日は通り抜ける。

強引に子どもを集めて、風化させないという話をしても、ほんとに体験した子が何人も居るなかで、親戚のお兄ちゃんが亡くなって、さびしいねん、とか言う子がおる。そういう子を前にしてな、ほんまに言いにくい。

これがな、全然知らん所に行って、「絶対に風化させてはいけないんだ」とか言うても、何にもならへん。知ってるから出来ない、知らん人だったら話ができる。

僕は、1月末から8月下旬まで、避難所であった中学校に関わっていただけであるが、教頭先生は、その前も後も、西宮市内のいくつかの中学校という現場で仕事をされていた。地震を「知っている」子どもたち、直接経験した子どもたちを前に、どのように向き合っていけばいいのかを考えないといけない場面を、幾度も「通り抜け」て来られたのだろう。

12年が経過し「現場」を離れた僕は、過去の経験として思い起こすだけであったが、教頭先生は、その後も同じ現場で仕事をされ、毎年1月17日を「通り抜け」なければならなかったのではないだろうか、ということに気づく。

そして教頭先生には、別の地震の記憶というものがあつた。1943年（昭和18年）の鳥取地震である。

鳥取地震は、9月10日午後5時37分に発生した。伊藤和明『日本の地震被害』によると「震源がきわめて浅かったために、地表は激甚な揺れに見舞われた」。同書には『鳥取県震災小誌』（昭和19年、鳥取県）からの引用がある。

平和な各家庭においては、楽しい夕餉の支度に忙しく、官庁や会社等においても、残暑の名残まだ消えやらぬ暑苦しい一日の勤めを終えて、やっと解放された気持ちで帰途につきつつあつた。（中略）道を歩いていた者は、瞬間に地上に投げ出されている自分を見出した。立ち上がろうにも立てないのである。そこかしこの家々からおこる悲痛な叫び声に続いて、バラバラと身一つで逃れ出る人びと。かくてこの瞬間に、家々の建物は、目の前で凄まじい土煙を立てて崩れて行つたので

ある。

僕はね、鳥取県の田舎の出身で、鳥取大地震というのがあったんや、私の生まれた43年に。おやじが9月やったと言うとった。私が生まれたのは12月や。私の叔父なんかも、ちょっと店に入っただけ、買い物しようかと思っただけ、まあええわと思っただけ、おやじの知り合いの家が会社の前の家で、その子どもは私と中学で同級生になったんだけど、その家が潰れて、助けにいったとか、そういう話はちっちゃい時から聞いたから、地震については、よう聞いたとった。

こうして教頭先生が、自分が生まれた年の鳥取地震のことを、親や親戚から聞いて今でも話せるということが、風化していない記憶の一例ということができるであろう。

風化させないことは、その時、生きた人たちが、災難に遭って亡くなった、あるいは何かのかたちで、やむなく転居してよそに行かれたとか、それぞれいっぱいある、個人個人の。一番不幸な人は家族を亡くした人や。

人間だれしも、一番そういうところでよく言われるのが、風化させないということや。それで今、それぞれの表現を一生懸命やっとなるわけでしょ、風化させないということで。それはあくまで自分が直接そういう被害なり、あるいは家族が亡くなるという非常に精神的に打撃を受けた皆さんについては、これはもう中々、一生拭い去る、生きとる間には絶対拭い去れないことやし、まして同じような体験をした沢山の人が集まった場面では、そういうことについては、お互いが、大変な精神状態のときから、それもずっと今まで12年もね、がんばって生きて来てはる訳だから、その場面でそうなった人と、われわれがそういう場面に遭遇して、こういう状態が起きて、そこで色んな対応をしたというような、今話をしたようなことはね、いつまでもそんなことを言うも、周りのことは知ってるから、自然と風化されてしまっただけ、そういうことを喋る機会も少なくなってくる。

あの時から2年とか3年の時には、色んな人が本を書いている。でも、自分の立場での物語でしかないわけや。自分で直接体験していない人が書いている本は、読んでおっても、通じるものが少ない。だから

なんぼ風化させまいとしてもな、本いっぱい残そうとしても、それはその時その時の立場がそうさせたもんで、それが風化を防げない。

今、あんたと話しとった、トイレのことでも、先生が手をつつこんで詰まったのを取っていかとか、夜中じゅう電話の10円玉替えたとかいうようなこと、なんも書いてないのや。いかに自分が自分の立場で一生懸命、こんなことあったからこうしたということしか書いてない。

あんたや、私、校長先生にしたって、[ボランティアの]Aさんにしたって、いっぱいそういう人は居るよ。けど、そんな人ほど、本なんか書かへんのやて。そんなもん書いて出されへんがね、人の前に。

ほんまにその場をね、現場のなかで、体を厭わんと対応した人が語り、話すんやったら、聞いたって、もな、現実味があるやん。風化させない、というのは非常に難しいことちゃう。ほんまに、それを話そうとは思わないしね、人の不幸を材料にな。

ボランティアもせんと、そこらへんを歩き回って、〇〇中学に行ったら教頭が遺体にドライアイスを入れてたとか、弁当を体育館の前で来た人に配ってたとか、日曜日に行ったら鳥取のほうから炊き出しが来てやっとなったとか、そういうものを見て、あんたが本書いたりするんやったら、誰かてな……。そうやなくて、ほんまに^{ひとところ}一所で、人間のな、ほんまの、心理状態とか、そういうものを体験して、実際のものの中で体験して、長いあいだのことを書いたら、それはそれで、金儲けでなしに、風化させないとか、ええ恰好言うた人が書いたものとは違うから、そういうものがきちんと残っていったらええんや。

だから、これを語り継ごうとかいう大それたことは、自分自身としては……。10年以上たって、今のように同じ体験した人とは、なんぼでも話できるしね、けど、細かい個人的なことは、よそでは言われへん、そんなこと、そやろ。そんなややこしい人間関係な。でも、それが現実。そうしてみると、ほんまに人間の生き方の縮図やな。聞かれたらパツと思ひ出すけど、そう何度も何度も人にしゃべって風化させないとかいう大それたことよりも、ね。

ー話しようがないですね。

そう、結局な、ひとの不幸をな、もう丸出しで言うこっちゃ、苦しいねん、そこが。入ってくる遺体をぱっと見た時にな、卒業生の顔が、そこに、目の

前にあったとかさ……遺体にドライアイスを入れるなんてこと、他の人は知らへんのちゃう。

それから、ひとつだけ、金工室にあった焼死体。小さかった……もう骨になってた。「これ預かるんですか」と言うたら「いやこれは、警察で対応します」ということで、すぐ、早めに持って帰りはった。

本当に風化しない記憶とは、誰に対しても伝えられる経験、可能な限りで多くの人に伝えようと思うような経験ではないだろう。

声高に語るのではなく、ある場面でだけ、聞く人だけに伝える気になる、そういうものとしての記憶は、

経験したその日から積み上げられるものだろうし、時間が経過したからといって風化するものではないだろう。その場で「どうしようもない」と受け止めるしかない程の経験だけが記憶にとどめられ、その後の自分の立場や人生の過ごし方とは関係なく、そのかたちをとどめたまま、時間を越えて留まり続けるのだろう。たとえ、語られることが少なくなったとしても、風化せず、記憶として留まるのであろう。

(2007年12月20日 未完)

参考文献

伊藤和明『日本の地震被害』2005年、岩波新書。